

人間の経済

第2期 第 **41** 号 (通巻 119 号) 2006年3月26日

目次

現代のお伽噺

エーリヒ・ケストナー／斎藤由紀子 訳

週刊マーケットレター (06年3月27日週号)

主要マーケット指標

長期金利は上限に上昇

2月の輸出数量、2桁増と好調

米物価安定と景気不安材料

曾我 純

金気と人気

森野 榮一

現代のお伽噺

エーリヒ・ケストナー / 斎藤由紀子 訳

(Erich Kästner, Modernes Märchen)

ふたりはとても愛し合っていた。

まるで物語のように。

お金も何もなかったけれど、

結婚して、いつも笑ってた。

彼に定職がないから、いつも貧しかった。

温かい食事は週に二回だけ。

それでも、「ぼくのチョウチョ」と彼女に呼びかけ、

彼女は彼に子どもをプレゼント、そんなふうだった。

家具付きの部屋に暮らして、病むこともなく。

子どもたちはタンスで眠った。

クリスマスには色鉛筆で壁に

みんなでプレゼントの絵を描いた。

ケーキのつもりでパンを食べ、

ガチョウの丸焼きを味わうふりをした。

そんなことがきっと想像力を高めた。

彼は突然！天才になった。

小説を書いて、たくさん儲けて

世界一の金持ちになった。

みんな初めは誇らしかった。でもだんだん、うんざりだ。

豊かになったら、楽しくなくなった。

お金は孤児にプレゼントした。
そうして、未長く幸せに.....

週刊マーケットレター（06年3月27日週号）

2006年3月26日

曾我 純

■主要マーケット指標

為替レート	3月24日（前週）	1カ月前	3カ月前
円ドル	117.50(115.90)	116.90	116.25
ドルユーロ	1.2035(1.2190)	1.1880	1.1870
ドルポンド	1.7425(1.7570)	1.7450	1.7345
スイスフランドル	1.3105(1.2900)	1.3180	1.3125
短期金利（3カ月）			
日本	0.11188(0.10625)	0.08250	0.06750
米国	4.96475(4.93000)	4.81000	4.52063
ユーロ	2.74013(2.70500)	2.64363	2.49375
スイス	1.23000(1.20750)	1.13167	1.00500
長期金利（10年債）			
日本	1.730(1.715)	1.595	1.545
米国	4.66(4.67)	4.57	4.37
英国	4.32(4.36)	4.16	4.18
ドイツ	3.63(3.68)	3.49	3.32
株 式			
日経平均株価	16560.87(16339.73)	16101.91	15941.37
TOPIX	1689.34(1663.98)	1647.74	1637.89
NYダウ	11279.97(11279.65)	11061.85	10883.27
S&P500	1302.95(1307.25)	1289.43	1268.66
ナスダック	2312.82(2306.48)	2287.04	2249.42
FTSE100（英）	6036.3(5999.4)	5860.5	5595.4
DAX（独）	5973.14(5882.38)	5870.79	5419.05
商品市況（先物）			
CRB指数	326.98(325.83)	328.90	326.31
原油（WTI、ドル/バレル）	64.26(62.77)	62.91	58.43
金（ドル/トロイオンス）	560.0(554.1)	558.8	503.0

■ 長期金利は上限に上昇

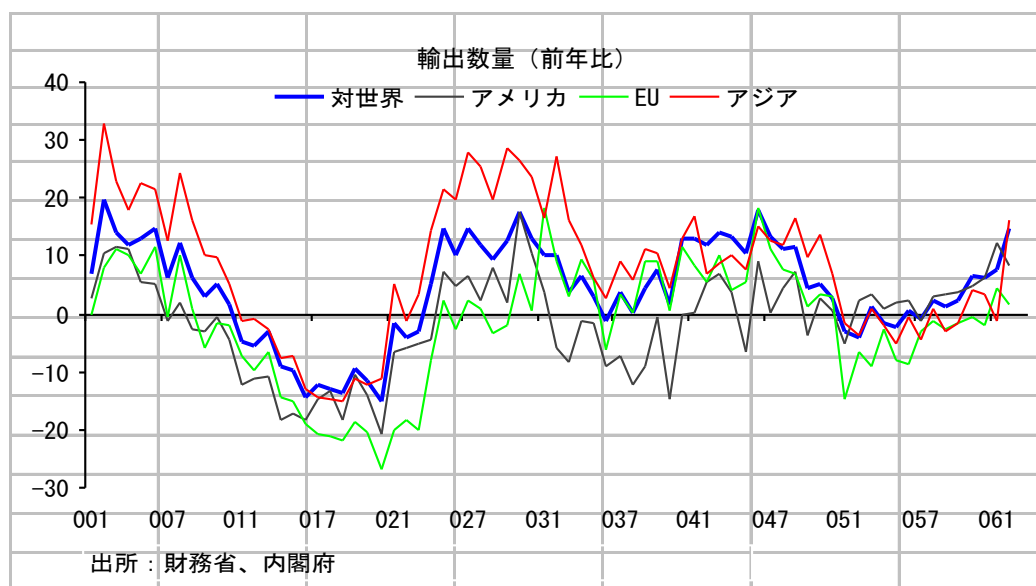
増益率の伸びが鈍化し長期金利が上昇すれば、株式市場も警戒感が強まり、業績面への関心が高くなるのは当然だ。一時、東証1部の出来高は30億株を超え、東証のシステムをダウンさせるほどの活況を呈していたが、先週末には15億株を下回り、商いはあきらかに萎んできた。量的緩和のつぎは間違いなく利上げとなり、ゼロ金利解除は量的緩和よりもはるかに大きいインパクトを株式市場に与えると、市場関係者は考えているからだ。

国交省の「地価公示」によると、06年の三大都市圏の商業地は15年ぶりの上昇となったが、これも長期のゼロ金利政策が土地取引に計り知れない影響を与えてきたからだ。金利が上昇していけば資産価格は逆に下がることになり、いままでのような旨みはなくなり、土地取引も正常な姿に近づいていくことになろう。前年比マイナス幅は縮小しつつあるが、全国平均（全用途）の地価は依然値下がりしており、都市圏と地方の地価の格差は拡大している。金利上昇は値下がりが続いている地方の地価に再び下方圧力をかけることになろう。

株価と都市圏の地価の上昇を景気を持ち上げた要因に挙げることができるが、金利が上がっていけば、資産価格は下落するので、実体経済の拡大による景気拡大がこれまで以上に期待されている。だが、鉱工業生産の動きからわかるように、昨年の夏以降の生産拡大は外需や原油価格高騰に支えられた部分が大きく、実体経済が自律的に拡大できたかといえれば疑問である。

長期金利は1.7%に上昇し名目経済成長率を超えた。戦後、10年毎の日本の長期成長率をみれば、名目成長率は60年代の年率16.8%から90年代には2.2%、05年までの6年間では0.3%まで落ち込み、ほぼゼロ成長の状態である。実質では60年代の10.4%をピークに90年代は1.7%まで低下し、05年までの6年では1.7%と横ばいである。昨年10-12月期の名目成長率は前年比1%台であり、団塊世代の退職や人口減に直面している状況で、さらに成長率が伸びるとは考え難い。せいぜい伸びても名目成長率は1%台であろう。成長の下ぶれ不安が強いことから、長期金利は名目成長率以下に収まるはずである。現状の長期金利の水準は、経済成長率から判断して上限近辺に位置していると思う。

■ 2月の輸出数量、2桁増と好調



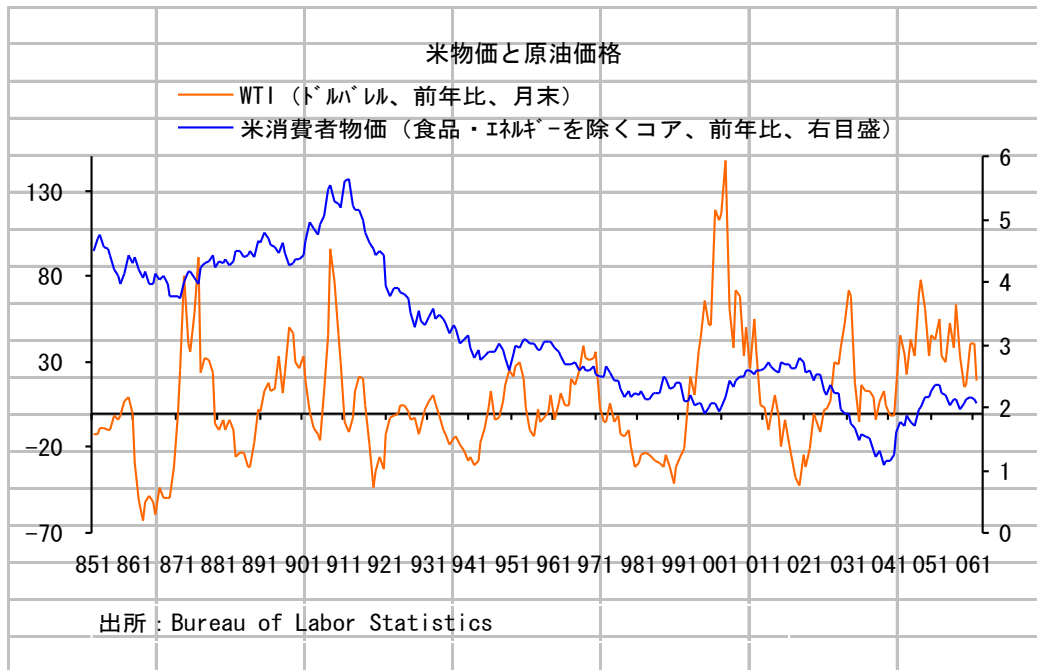
2月の数量ベースの輸出は前年比14.7%と04年6月以来の高い伸びとなった。輸入は数

量ベースで5.3%であるから、輸出が10ポイント近く上回ったことになる。輸出が輸入よりも高い伸びに変わったのは昨年10月以降である。輸出は05年2月の4.2%減を底に回復し、8月からは連続のプラスである。輸出回復の原動力は米国であり、対米輸出は昨年1月に底を打ち、回復力を強めていった。対欧州は昨年12月まで1年マイナスが続いたが、2月まで2ヵ月連続の前年比プラスだ。対アジアは昨年10月までは低調であったが、その後は盛り返し、2月は16.1%と04年9月以来の高い伸びとなった。

02年1月を谷とした景気拡大過程で、輸出は02年と04年にすでに2回の山を形成したが、今回の山で3度目になる。こうした輸出の変化に合わせて、鉱工業生産の波もほぼ同じような形を形作っている。鉱工業生産は輸出にやや遅れる傾向があり、当面、好調な輸出によって鉱工業生産も堅調な足取りが期待できそうだ。ただ、輸出が前年比プラスに転じてからピークに達するまでの経過月数（1年以内）を考慮すると、夏までに輸出はピークを付けるだろう。

■ 米物価安定と景気不安材料

2月の米消費者物価（コア）は前月比+0.1%と安定した動きをしており、インフレに進むような気配は感じられない。総合指数も0.1%にとどまり、前年比では3.6%と昨年9月から1.1ポイント低下した。生産者物価も2月、前年比3.7%と昨年9月の6.9%から大幅に低下しており、消費者物価の低下要因になろう。原油価格は依然バレル60ドル台にあるが、前年比では10%台に低下しており、物価への影響は薄れ、夏にかけて消費者物価のコアは前年比1%台に低下するであろう。



FRBは今週のFOMCでFFレートを0.25%引き上げ4.75%にする見通しだが、物価ではなく実体経済の強さを和らげるための利上げなのだろう。バーナンキ議長をはじめとする理事・総裁は、実体経済は予想を上回る成長を維持しているととらえており、実体経済の強さがいずれ物価に波及するとみているのではないか。

米国経済のすべてが健全かといえば、不安なところもある。2月の米住宅着工件数が前月比7.9%減少したほか、新築住宅販売も-10.5%と大幅に減少し、住宅市場も縮小の兆しをみせてきた。住宅市場の拡大は家具や電化製品等の売上増に結びつき、これまで米国経済の拡大に大きく寄与してきた。不動産価格の値上がり、ローンの借り換えを促し、借り換えによって得た資金を消費に回すという形で、消費水準を引き上げた。不動産価格が横ばいになり、住宅販売が減少することになれば、こうしたプラス要因が消え、米経済は本格的に減速していくだろう。

2月の米耐久財受注は前年比7.8%増加したが、コンピューター及び関連製品は1.0%減、自動車・同部品も0.1%と冴えない。資本財(航空・軍事を除く)はプラスだが、前年比6.1%に低下しており、設備投資も下向きに動き出しているといえる。米長期金利の上昇幅が大きくなるのは、このような不安要因が、先行き徐々に現実のものになる可能性が高いと判断しているからである。

かねけ ひとけ 金気と人気

森野 榮一

通かよいということばがあります。まあ、いろいろな意味がありますが、その一つに、昔、米や薪など日用品の買い物や仕上げ物の代金を、現金でなく、帳面につけて、月末や盆暮れなどにまとめて支払う方法があり、それを通と称しました。落語をよく聴く方は先刻ご承知かと思えます。商店主が集金に向かうとき、下げていくその帳面を指して通ともいいました。通い帳ですね。

明治12年新富座初演の河竹黙阿弥の歌舞伎脚本『人間萬事金世中』にんげんばんじかねのよのなかに、米屋の宇四郎と薪屋の勘次郎が通をさげて、取り立てに侘びしい暮らしの裏借家へやってくる場面があります。

そこに、家主の武太兵衛ぶたべえが、こう口火をきり、やりとりが始まります。

武太 これこれ二人の衆、あんな貧乏人を相手どつて願つた所が入費損で、向うの入費を差配人が立替るような事に成行き、甚だ迷惑しますから、それよりわしが承知だから家のがらくたをあらひざらひ、貸かしの抵当かたに持つて帰らつしやい。

宇四 家のがらくたといつた所が、油揚みのぶとんのような三布蒲団あらめに荒布のやうな搔卷かいまきが一枚、腐つた畳が三畳半ほごはりしやうじに反古張障子が二三枚、

行火あんかが一つに口の欠けた薬土瓶や七輪では、五厘の値打も覚束ない。

勘次 金気といつたら台所に鍋が一つあるつきりで、素麵箱に古手桶、瀬戸物小鉢をかき集めた所で、天道干に並んゐる一品文久の代物ばかり、掘出し物にならうといふめぼしいものは一つもない。

貸しのカタに家中の洗いざらいもっていかうかという算段ですが、ここで金気と言っています。鍋が金物だから、そういつているのではないでしょう。金気にはそういう意味もありますが、そのモノがかねめのモノかどうかを示す雰囲気、さらには金銭そのものまで金気と言ひ表しました。ここは、そうした貨幣への変換可能性を指しているようにとれます。

つまり、家の実物あれこれをカタに取り上げても、それをカネに変えなければなりません。容易にカネになりそうか、そうでないか、人が感じ取るその気配であります。金気があるものかどうか、モノにとってはどうでもよいことですが、人間はモノにそうした気を与えています。それはモノを取り巻く人間たちの動きの感じ方でもあります。気はもともと無目的で動きの定まらぬ変化の様をその属性として持つと観念せられて来ましたから、金気とはいわば私たちの社会性といつていいか

と思われます。私たちは、モノの値打ちを決めようとするばかりか、その値打ちでカネに変わるかどうかまで、拘泥し、そのことによって他者を意識しているわけです。

まさか人に対してまで、金気が感じられるかどうか目を利かせることはないでしょうが、もしかしたら、意外にも、人々の交流のなか、^{ひとけ}人気を感じるのでなく、人間にも金気を感じとることに一生懸命な人もいらっしゃるのかもしれない。

そんな時はモノのようにたたき売られたり、処分されたり、カネに変わったりと、よく似た扱いで、一件落着のおぞましさ。くわばらくわばら、です。

ここで彼らがしている算段はがらくたがどれほどの値打ちを持つかの値踏みですが、今ふうに言えば、がらくたの価値を問題にしているわけです。価値とはなんなのでしょうか、日常語の世界で考えてみましょう。

日本語に、かち、あたい、ねうち、いろいろ言葉があるのはすでにご存じのところでは。

問 ところでねうちを書き表すのに昔は(明治初期頃までは)どんな漢字を使っていたのでしょうか。

答 ^{ねうち}直です。ねだんは直段と書きました。

問 なぜ直を使うかわかりますでしょうか。

答 直の反対語は曲。「事の曲直を問う」なんて言い方がございます。直は真正(真実であり本物であること)を指し、曲はまがい物を指します。「曲がった根性」などといいますね。

つまり、ねうちにはまがい物ではないことが含意されているわけです。^{ねだん}直段というとき、段は格付けを意味しますから、まがい物でないものがいかにほどの格付けを得ているかを指します。

ここで直段が、モノという、触知しうる、また知覚しうるものを、その真正性の評価を経て、表象する手続き全体及びその結果としての数詞化を意味していることがわかります。そうして金気は金銭と同義になりゆきます。まったく、まがい物でないことまで、金銭にて確証されるというわけです。

現在私たちが使用している、このカネ、つまり法定通貨ですが、それは中銀債務の貨幣化です。つまり世の中に出回っている日銀券は、日銀の債務です。日銀の債務方にそれに見合う金額が書かれているわけです。日銀に1000円札が戻れば、その分、債務方の金額は減る勘定です。

では、1000円札をもって、この債務を返済しろと日銀に出かけていくひとがいるかといえば、いません。日銀は代わりに渡すものをどれだけもっているかといえばおそらく発行額に較べて、それほど持っていないでしょう。兌換券の時代は、正貨(金)でしたが。

そのカネで買えるモノのすべてによって、日銀券は信用されているともいえます。ということは、それによって購入しうるモノやサービスは、つまりは金気を与えられているともいえます。日銀券が信用されることと、それはちょうど裏返し of 事情といえるかもしれません。モノやサービスは日銀券に恋いこがれているわけです。金気の認められないものは、売れそうもないものですから、無価値というわけです。売れなきゃしょうがないと。

ところでワットも債務の貨幣化にちがいはありません。違いは、発券者や裏書人が債務を返済する、清算すると約束していることです。日銀に借りを返せといいにくい人はいないのに、ワット債務は当事者、つまり発券者や裏書人に清算請求がくるわけです。

なんということでしょう。日銀になりたいとお思いでしょうか。

この違いはなにに由来するのでしょうか。

それは、私たちが日銀となにかを交換する経済関係を取り結んでおらず（実際、個人は日銀に口座などもたせませんでしょうか）、ワットの場合は交換をしているからです。いわば日銀券は私たちの経済社会に外注されるものです。しかしワットは経済社会のなかで生まれます。

たしかにワットも債務ですが、それは時間のずれた交換なのです。いっせのせでとりかえっこをする交換の場合は、信用は極端に小さくてすみます。相手が裏切るチャンスはとも少ないですから。

しかし時間がずれるほどに、信用の要素が膨らんでくる必要があります。この意味で交換は信用の出発点といわれるわけです。

ワットの場合は、債務が立ってから清算を向かえるまでの期間、持ち手を変えて、決済手段（貨幣の一機能）として振る舞い続けます。それは交換から始まる信用のプロセスといえるわけです。

そこでは交換されるモノやサービスは金気とは違った気（社会性）のなかにあるでしょう。法定通貨に恋していないからです。

もちろん、ワットでも現金を使う取引同様、

取引でなにが取引されたのかは当事者しかわかりません。しかしワット券が発券されたり、受領されたりする事実そのものが、具体的な事物が真正と認められ額面価額に格付けされ値段となり、数詞化され表象されたことを指し示しています。ワットも同じ金気なのかい？と思われそうです。

しかし、法定通貨による金気はモノの「直」つまり真正性をほんとうに量っているのでしょうか。ワットは人々の信用の連鎖（ひとけ）です。人気（ひとけ）が評価され、それがモノや役務に付帯するようになるのです。ワットにおいては、取引される事物は人気の数詞化となるのでしょうか。

加えて、ワット券における「広告機能」は、それによって発券者が債務を弁済しうることを示してもいますので、以前よく見られたような、広告の追記による追加弁済約定の記載は将来の清算の真正性を予想させ、そのことによって額面の「直段」（金額）の真正性を補強することになります。それはまた、当事者本人がまがい物でなく真正の人であるとの信用を獲得させていくことでしょう。

ワットによって人は人気のある人間になる可能性が与えられます。

ゲゼル研究会では第二期「人間の経済」誌の原稿を募集しています。

ゲゼル研究会では会誌、「人間の経済」を刊行してまいりましたが、会員の各地に叢生する地域通貨の動きへの関与等により、刊行継続の体制がとれず、1年ほど休刊のやむなきに至っておりました。

しかし、社会経済状況の変化や多様化する各地の貨幣改革の展開を見るに、時宜を得た会員の諸研究を世に問う必要性を痛感しているところです。

また、各地からの問い合わせ、情報提供の依頼も多く、会としての系統的な情報の提供、焦眉の課題に関する研究成果の迅速な公開の必要性も強く感じてきたところです。

今般、体勢を立て直し、会誌「人間の経済」再開（第二期創刊）に取り組むこととなりました。

基本的な会誌の性格は第一期と変わるものではありません。

理論的な研究から各地の取り組みの現状、そのナマの声まで、多様なテーマの論考を掲載していきたいと考えております。

広く論考を求めていますので、諸姉諸兄のご支援、ご協力をお願いいたします。

第二期、「人間の経済」、簡易印刷版、及びHPでのPDF版提供

不定期刊

投稿資格 特に設けず

投稿 常時受け付け

投稿論文の著作権は著者に帰属

原稿料はありません

ご連絡は info@grsj.org まで。

編集・発行 ゲゼル研究会

2 2 1 - 0 0 2 1 横浜市神奈川区子安通 3 - 3 2 1 森野榮一 気付

Gesell Research Society Japan

<http://grsj.org/>

info@grsj.org

Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず